
速弁でジャムパン

津雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

速弁でジャムパン

【コード】

N6333H

【作者名】

津雲

【あらすじ】

元々はサイトにあげたものです。銀魂3の沖田と神楽の話

「またジャムパンですかい？」

桃色の髪を大きく揺らして上を向くと、クラスメイトでライバルの憎たらしい笑みがあつた。

ただでさえ、彼の方が背が高いのにしゃがみこんでいる今の状態では、彼が更に大きく見えた。

「それがどうしたアルか？」

彼女は苛立ち混じりに答えた。

だってそうだろう、栗色の髪をしたコイツの事だ、因縁をふっかけてきたに違いないのだから。

「速弁するから腹がもたねーんでさア。

一番安いジャムパン買うぐらいが精一杯なお金しかもってねーくせによ。」

これは沖田の言うとおりだと彼女は感じた。

元々大食いな方とはいえ、食べるタイミングを考えれば我慢のしよもあるだろう。

食べるのは好きだが、誘惑に負けて食べてしまい、小遣いを消費するのは自分でもバカだと思っし、たまに嫌になる。

だが、他人にバカにされるのは嫌だ。

「育ち盛りの食欲なめんなヨ。
それに私はジャムパンが好きだけアル！」

本当はカツサンドや焼きそばパンの方が食べ応えがあつて好きだが、それは言えなかつた。

速弁した挙げ句、またお腹が減つて我慢しきれず、空腹を埋めるためにけななしのお金を使っている事をコイツはバカにしているのだからだ。

「それなら前にお前が購買で珍しく昼飯にパンを買つてた時、カツサンドやコロツケパン、焼きそばパンとかは買つてもジャムパンは買わなかつたのはなんででさア？」

ニヤニヤと勝ち誇つた笑みで沖田が神楽を見ながらそう言った。

「あの時は甘い物が食べたい気分じゃなかつただけアル！」

そう言い返しても、言い訳にしか聞こえないのは彼女も分かつている。

それでも、黙つてサド野郎の言う通りだと認めるのは神楽のプライドが許さなかつた。

「はいはい、そういうことにしてやらア。」

「なら最初から言うんじゃねーヨ！ー！」

食べかけだったパンの残りを口にいれ、立ち上がるつとす。

沖田を殴るためにだ。

しかし立ち上がろうと力を入れる寸前のところで沖田が何かを投げ渡してきた。

反射的に飛んできたそれを受け取る。

それはジャムパンより値段が高く、大好物のカツサンドだった。

「それやるから、落ち着きな。」

そう言うと彼女の横に沖田が座ってきた。

「でもそれじゃお前の昼ご飯が減ってしまうネ……。」

ライバルの意外な行動に神楽は思うように言葉が出なかった。

「俺はいらねーんでさア。」

姉上が最近、病気が治った反動で食べ過ぎちまって少し太ったとかでダイエットしてるんでさア。

で、それに付き合うつもりだったのをすっかり忘れて買ったただけだから、それ。」

そう言うと、彼は持っていたフアントアの缶を開け、缶のふちに口をつけ飲み始めた。

「お前、シスコンかヨ。」

まあそう言う事なら仕方なく食べてやるネ！」

にっこりと笑顔を沖田に向け、カツサンドの袋をあける。

途中、沖田の方を見ると顔がほのかに赤く見えたが、彼女は気にしなかった。

そんなこんなで昼飯時は過ぎていった。

速弁とジャムパン

（本当は姉上に付き合ってたのは嘘で、お前が好きだからあげたなんて恥ずかしくて言える訳がねえや。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6333h/>

速弁でジャムパン

2010年12月5日14時37分発行